

藤原成淳展 — 仮面の視線 —

作家と作品理解のために



東大寺二月堂 お松明（お水取り）「修二会」

[発端と所感]

東大寺大仏開眼の天平勝宝4年（752）開眼供養会が開かれたその年より、実忠和尚は60年もの間一度も休まず「修二会」の行法を修め、その行中に他界した。

古都奈良東大寺にこの修二会の行が現在まで1244年に亘って続いているのは、まことに稀有なことである。来年も3月1日から14日にかけて行われる。

西暦752年、この行法を創めた実忠和尚とはどのような人だったのか？

この実忠和尚の足跡を辿ってゆかりの寺社を幾度となくも尋ね歩き、その場にわが身を投棄し無心になった時、意識に登ってくるものを体験した藤原は、西欧近代的思考から出てくる現代思潮やその必然の結果としての世間の風潮に抗い、我々日本人の意識の深層に記憶された本然的アイデンティティを、何とかアート作品の中に表したいという衝動から、和紙と墨と木版によるインスタレーションとして表現活動を続けている。

藤原の意図は稀有で、その表現活動は貴重なものではないか？ 意識の表層をくすぐる美的なアートも日常の生活に彩りを添えるものであるが、藤原のように意識の深層から搾り出したような、重く硬い表情のアートは見る者に優しく微笑みかけないがゆえに、一見取つきにくいと思う。しかし藤原作品の生まれ来る深層を知るに及んで、作品のタイトルに潜む意識の起動ボタンを感じるようになった。藤原作品は、テロリズムと戦争（命の軽視）、虚無と不信、社会的無関心と利己主義、拝金主義と刹那的快樂等に走る現代人に、反省と自重を促し、今生きる、明日より良く生きるための糧になるのではないのか？

仮面をかぶっているのは誰なのか？ 我々は本当に真実の世界を見ているのか？ 誰にも死が刻々と迫って来ている。嵐が来ても動じない本来の自己を見届けるまで、おちおちしてられないのではないのか？・・・と色々な疑問が沸いてくる。藤原は人生の大半を“読み込み”作業に費やし作り上げてきた作品に賭けて、我々に、見よ、見よと迫って来る。

藤原成淳展 — 仮面の視線 —

作家と作品理解のために

[生い立ちと作風、創造の契機]

藤原は1957年山梨県に生まれ、1980年東京藝術大学絵画科油画専攻卒。今年51歳になった。つい先頃、母の他界という現実を見た。藤原の実家は山梨で代々神社を守る古い家柄で、祖父は神官であった。こうした環境で藤原は子供の時から、毎年師走には初詣用の御札を刷るのを手伝っており、板や紙、墨といった素材に、小さい頃から慣れ親しんでいた。その後芸大に進み、版画を専攻したのは、版画が幼少の頃より身に付いた表現手法であったためであろう。藤原の作品は過去一貫して、木版を使い「上」、「下」などシンプルな漢字を縦横にモザイク状に並べ、墨により和紙、木材、耐火煉瓦等に転写したものを空間にインスタレーションするという構成の作品群である。

作家は作品で使っている和紙や木、墨という材料について「私たちの生活しているこの東アジアの長い歴史の中で培われ、洗練されてきた素材なので、それを使うことで、私たちの近代以前から現代までを見通すことが出来るのではないかと思います。私達は自分達の住む国について知らなすぎると思います。私は美術という方法で自分や自分たちの場所を明らかにしてゆきたい」と語っている。

[スピカアートでの藤原作品]

今回のスピカアートでの藤原作品は、一辺90cmの正方形に内接する円形の図柄に「下」文字を刷り込まれた和紙を58枚作成し、これを展示空間の床壁一杯に敷設することで、白壁・モルタル床で構成されたモダンで端正な展示前の空間は、今まで経験したことの無い非近代的感性の重厚かつ端正な空間に突如として変貌した。この空間は藤原の作品そのものである。

ここで藤原・作品を理解するために、作家が作品を生み出すモチーフを、2004年以降の展示に作家自身が添えた解説や、展示者の質問に答えた作家の回答等を編集紹介する。

- ① ジュド・チフルの視線 2004 /gallery 覚 東京
- ② 格物窮理の視線 2004/建部神社 八ヶ岳南麓
- ③ 視線の現実・往路展 2005 /建部神社→gallery 覚
- ④ 仮面 2006/gallery 覚 東京
- ⑤ 仮面の視線 (今回) 2006/spica art 東京

[ジュド・チフルの視線] ジュド・チフルとは誰のことか？

毎年3月1日から14日にかけて行われる東大寺二月堂のお水取り（または、お松明）は今日まで1244年にも亘り連綿として伝えられている。この行事は旧暦二月に行われるので「修二会」と言われている。この行を草創したのは、当時東大寺大学頭を勤めていた実忠和尚（じっちゅうかしょう）、古代ペルシャ語名ジュド・チフル（「異邦人・異種もの」という意味）である。実忠和尚の伝説を辿ることは、日本仏教におけるゾロアスター教文化の渡来・融合や、悠久の時間・空間を往来して現在、東大寺の行事として人々の中に溶け込んで存在するものを偲び、思い起こさせるもの。

藤原成淳展 一仮面の視線一

作家と作品理解のために

[お水取りの由来]

お水取りについては、少々長くなるが、東大寺のサイトから以下に引用する。

東大寺に伝わる『二月堂縁起』は修二会の始まりを次のように紹介している。

「天平勝宝三年辛卯十月、実忠和尚（じっちゅうかしょう）、笠置寺の龍穴より入て、北へ一里ばかりを過（す）ぐるに、都率（とそつ）の内院なりけり。四十九院、摩尼宝殿を巡礼す。其内、諸天衆（てんじゅう）集て、十一面悔過（けか）を勤修（ごんしゅ）する所あり。常念観音院と云う。聖衆の行法（ぎょうぼう）を拝して、此の行（ぎょう）を人中に摸して行うべき由（よし）を伺（うかがう）。聖衆告（つげ）て曰（いわ）く。此の所の一昼夜は、人間の四百歳にあたる。然（しから）ば行法の軌則（きそく）、巍々（ぎぎ）として千返（せんべん）の行道（ぎょうどう）懈（おこた）らず。人中の短促（たんそく）の所にては更（さら）に修めがたし。また、生身の観音をばましまさずば、いかでか人間すべからく摸すべきと云う。和尚重て申（もうさ）く。勤行（ごんぎょう）の作法をば急にし、千返の行道をば、走りて数を満つべし。誠を致（いたし）て勧請（かんじょう）せば、生身何ぞ成給はざらんとて、是を伝えて帰りぬ。」

行法の伝授を請う実忠の懇願にもかかわらず、都率の天衆は、「この天の一昼夜は人間界の四百年にも及び、行法のきまりは厳しく、日々千返の行道を怠ることなく勤めなくてはならない。時間に限りのある人間の世のこと、到底この行法を修めることはかなわぬ。」と実忠を諭（さと）します。「ましてや、生身の観音を本尊となさねばならず、人間の手によってこの行法を全うすることはかなわない。」と

しかし実忠は諦めませんでした。「人間界の時が天界の時に及ばぬというのであれば、勤行（ごんぎょう）は調子を速め、行道の回数は走ってでも数を満たそう。生身の観音菩薩とて誠を尽くして請い願えば、たまわらないことがあろうか。」

かくして行法は伝えられ、次に『二月堂縁起』は生身の観音の勧請（かんじょう）の段となります。

「実忠和尚、摂津国難波津に行て、補陀洛山（ふだらくせん）にむかひて香花をそなへて海にうかべ懇請（こんぜい）をぬきいでて祈精勧請（かんじょう）す。かの闍伽（あか）の器はるかに南をさして行きてまた帰り来る。かくする事百日ばかりを経て、つみに生身の十一面観音まのあたり補陀洛山より闍伽の器に乗りて来給へり。和尚（かしょう）是を当寺の竊索院に安置し奉る。今は二月堂という。」

翌天平勝宝四年（752）二月、実忠は生身の観音の御前にて二七ヶ日夜六時の行法を修し、以後大同四年にいたるまで六十回になんなんとする参籠を数えたと縁起は述べています。天平勝宝四年といえは四月に大仏開眼供養会が挙行された年、くしくも我が国に仏教が伝わって二百年目とされる年でした。

(出典 <http://www.todaiji.or.jp/index/hoyo/syunie/yurai.html>)

東大寺二月堂修二会（お水取り・お松明）について

この法会は、現在では3月1日より2週間にわたって行われていますが、もとは旧暦の2月1日から行われていましたので、二月に修する法会という意味をこめて「修二会」

藤原成淳展 一仮面の視線一

作家と作品理解のために

と呼ばれるようになりました。また二月堂の名もこのことに由来しています。

行中の3月12日深夜(13日の午前1時半頃)には、「お水取り」といって、若狭井(わかさい)という井戸から観音さまにお供えする「お香水(おこうずい)」を汲み上げる儀式が行われます。また、この行を勤める練行衆(れんぎょうしゅう)の道明かりとして、夜毎、大きな松明(たいまつ)に火がともされ、参集した人々をわかさせます。このため「修二会」は「お水取り」・「お松明」とも呼ばれるようになりました。

「修二会」の法要は、正しくは「十一面悔過(じゅういちめんげか)」といい、十一面観世音菩薩(じゅういちめんかんぜおんぼさつ)を本尊とし、「天下泰平(てんかたいへい)」「五穀豊穰(ごこくほうじょう)」「万民快樂(ばんみんけらく)」などを願って祈りを捧げ、練行衆と呼ばれる選抜された11名の僧侶が、人々に代わって懺悔(さんげ)の行を勤めるものです。前行、本行をあわせてほぼ1ヶ月、準備期間を加えれば3ヶ月にも及ぶ大きな法要となります。

(出典 <http://www.todaiji.or.jp/index/hoyo/syunie-open.html>)

[“読み込み”について]

藤原が作品制作に取り掛かる前には、作品化するテーマについて、まず“読み込み”という過程がある。ギャラリー覚 一音吉通信番外1号(2004年発行)に、この“読み込み”についての下記の質疑解答がある。

Q

藤原さんの継続している“読み込み”という作業はいつから何をきっかけにされるようになったのですか？

A (藤原)

ヨーロッパの造形から制作するという眼を訓練した19才の私が、奈良や京都の寺院をめぐる時、「この世界はちがう」ということが脳裡によぎった。ヨーロッパの造形の眼からでは捉えられない現実を前にして「その世界性とは何か」を立ち寄る寺院・神社という「場」でスケッチブックに鉛筆を走らせながらその問いを投げ掛け続けた。寺院や神社という現場でその時捉えられないことは、テキストによって学びそこで吸収したものは現場に行き行って検証するという作業を繰り返す、やがて二十代の中頃には描くということを通さず、寺院や神社という場に直接身を投げ出して、ヨーロッパとは異なるもう一つの現実である世界を読み込むということを開始した。このような、古典あるいは伝統と呼ばれる世界を今日の視点から、それを過去のものとして見るのではなく、近代の合理的世界とは異なる「もう一つの現実」として見詰めていくということが——なぜ(現在)描かずに読むことを始めたのかという理由であり、十代後半から今日まで継続している“読み込む”という作業の意味である。

(出典 <http://www6.ocn.ne.jp/~g.kaku/otokitibangai1gou.html>)

(編集・解説 スピカアート 西嶋善昭)